

第 7 0 回 近畿地区大学建築系学科
卒業設計コンクール応募作品一覧

平成28年4月12日
日本建築学会近畿支部

No.	作 品 名	学生氏名	大 学・学 科	図面 枚数
1	滋賀シネマスクエア	藤原 真輝	滋賀県立大学 生活デザイン学科	2
2	つなぐ ―過疎地域の学校再生計画―	吉田 愛	帝塚山大学 居住空間デザイン学科	6
3	OOTSUNAGU	志藤 拓巳	京都大学 建築学科	6
4	久遠の環 ―神戸・布引ダムの転生―	塚越 仁貴	神戸大学 建築学科 (建築デザイン)	10
5	Umbrella for Humanity ―フィリピン・ラカン州 貧困層再定住地における居住の提案―	山口 侑香	関西大学 建築学科	8
6	ダークツーリズムと未来 ―阪神淡路大震災から学ぶこと―	井上 望	成安造形大学 芸術学科	3
7	Surrealism Architecture	奥田 まり	武庫川女子大学 建築学科	6
⑧	百年地図。	持井 英敏	大阪工業大学 空間デザイン学科	13
9	移ろいを彩る ―夙川における駅の在り方―	仲川 絵理	神戸大学 建築学科 (都市デザイン)	7
10	まちが育みまちが育つ教育空間 ～月の軸と大住の軸の交わり～	平井 彩夏	摂南大学 環境デザイン学科	6
11	巢のような建築	松岡 瑛美	京都工芸繊維大学 造形工学科 (建築2)	7
12	「地」になじむ～富田林歴史資料施設～	土井 康永	近畿大学 建築学科	1
13	きづきの森 ―徳島市における短期滞在型 予防医療施設の計画―	原 智絵	兵庫県立大学 環境人間学科	7
14	幻影	中村 勝広	大阪大学 地球総合工学科	10
15	Collective Castle ―京都屋台ステーションとしての集合城―	加藤 采	京都造形芸術大学 環境デザイン学科	6
⑬	大阪人博覧会 ―ミナミを繋ぐ日常のミュージアム―	石川 一平	立命館大学 建築都市デザイン学科	15
17	だれもいない 清水の舞台	小林 大陸	摂南大学 建築学科	14
18	因島土生小学校 CONVERSION ～つなぐ・広がる島と人～	倉下 未来	武庫川女子大学 生活環境学科	11
19	山麓の記憶	太田 奨吾	京都府立大学 環境デザイン学科	5
⑳	ろ う	相見 良樹	大阪工業大学 建築学科	10
21	かもがわステーション	伊藤 響	京都工芸繊維大学 造形工学科 (建築1)	13
22	Nature, Artificialities, Intersection ～Shin-Kobe	川下 史博	神戸芸術工科大学 環境・建築デザイン学科	8
23	Growing Minority Groups :Individualization in the Kadomadanchi Housing Area	一村 春音	京都女子大学 生活造形学科	4

(受付順) 以上23点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部
平成27年度近畿地区大学建築系学科
卒業設計コンクール（第70回）審査報告

審査員長 浅野 博光

平成28年4月12日（火） 審査会場・大阪科学技術センター（6階600号室）

審査員長（互選） 浅野 博光
審査員 伊藤 泰・内海 慎介・大澤 智・北村 潤・楠 敦士・三好 陽介
(50音順)

応募作品 23点（別紙参照）

審査経緯

審査員は設計事務所、ゼネコ設計部所属の計7名で構成され、厳正公平に審査をし、応募23作品から入選作3点を選出した。今年も力作揃いで選出は3次審査にまで及んだ。

まず、1次審査として、審査員各自が全作品を審査し、各自6作品を選出した。集計の結果、作品No.20が満票を、作品No.8が6票獲得したので、まずは入選とした。残り1作品を選出するにあたり、0票の10作品は落選とし、1票以上獲得した11作品について、1作品ごとに全員で作品を囲みながら議論し、選出していった。1票獲得した4作品、2票獲得の2作品について、選出した委員が選出理由を述べ、全員で審議した結果、これら6作品は落選となった。いずれの作品も、卒業設計ならではのチャレンジが評価されたが、作品の完成度としては未消化な部分があり、入選に至らなかった。

3票獲得の作品No.3は自転車を題材にし、優美な曲線造形が魅力的な作品で高く評価されたが、他の上位作品と比較して審議した結果、落選となった。

2次審査として、4票獲得の作品No.5、No.14と、5票獲得の作品No.4、No.16の計4作品を審査員全員が再審査し、各自1作品を選出した。

No.4はダムのでけの再利用という新鮮な着眼点が評価された。No.5はフィリピンの住宅をつぶさに現地調査した結果をもとに詩的な建築提案にまとめられており、タフな調査力とやさしい眼差しが審査員を魅了した。No.14は下町の生活の息づかいを建築に表現していて好感が持てた。No.16は天王寺駅舎を題材に阿倍野界隈の雑多な魅力を存分に建築的に表現した力強さが圧倒的だった。

集計した結果、作品No.16が5票、No.5が2票獲得し、0票の作品No.4、No.14が落選となった。

3次審査として、作品No.16、No.5がいずれも力作であることから、1次審査で入選とした2作品も見直すことになった。

満票のNo.20は総合的に見事な出来栄であることが再評価され、入選となったが、6票獲得のNo.8の入選を取消し、作品No.5、No.8、No.16の3作品のうちから入選作2点を選出することとし、再審査した。議論を尽くした後、各自2作品を選出し集計した。その結果、No.16が7票、No.8が5票、No.5が2票となり、No.5が落選となった。最終選考は違う方向性の作品の比較となったが、入選はNo.8、No.16、No.20で決定した。

今回、応募作品は個性的で表現力豊かな力作揃いであったが、勝敗をわけたのは、卒業「設計」コンクールということで、作品がどれだけ建築に対する感性がかもしだす魅力をもっているか、また、建築の構成にかけたエネルギー量からくる建築の迫力がどれほどあるか、が決め手になったと思われる。

学生のみなさん、卒業設計にかけた情熱を持ち続けて、ますますご活躍されることを大いに期待しています。

(浅野)

審査概評

音楽家や画家になろうとする人は小さな頃から音楽や絵画に親しんできた環境にいたるだろうが、建築についてはおそらくほとんどの学生が大学に入ってから勉強し始めるのだと思う。学部卒業時に専門課程での建築計画を学ぶ期間を考えるとコンクールに出展された全ての作品のレベルの高さに正直驚く。

アートと建築の最も大きな違いは「機能」を有しているかによる。通常の建築の設計では機能は外から与えられる。卒業設計では制作者が自ら機能というプログラムを作りそれに応える。いわば自作自演で、シナリオの良し悪しが作品のレベルを決めるという構造が卒業設計にはある。

プログラムが内部化されているためか、ファンタジックな作品になる傾向が多く見受けられるが、審査会ではプログラムを含め建築的にリアリティのある作品が評価された。

プログラムの組み立て方には帰納的な方法によるものと演繹的な思考によるものに分けられるように思える。典型的なのが、デザインサーベイからプログラムを組み立てる手法が帰納的といえる。今回の出展作品の中にもその手法によりながら作品としても評価され、カテゴライズの上選出が検討される場面もあったが、最終的には個々の作品の持つ力によって入選作品が選ばれる結果となった。

(北村)

百年地図。

持井 英敏君 (大阪工業大学)

作者の生まれ故郷である古い街並みが残る港町・鞆の浦を計画地とし、この街を 100 年先までいきいきと生き続けさせること、をテーマとした作品である。観光で街が活性化される一方で、見かけのみの街並みが保全されることや、観光客がうみだす交通渋滞を課題としている。

街の中心から離れた位置に観光客のための駐車場を設け、そこから船に乗って海から街にアプローチすることで、交通渋滞の問題解決を新たなシークエンスをうみだす仕掛けにうまく変換させている。計画建物の機能としては、地場産業施設や観光センターなどである。プログラムとしてはありがちであるが、これらを海に浮かぶ浮遊建築とすることで、潮の満ち引きにより、時間や海との距離感の変化を感じさせるとともに、既存の街並みに新たな風景を創り出すことに成功している。

これらの提案と相まって、提案の組み立てや紙面構成、ドローイング、模型などプレゼンテーションにおいても質・量ともに高いレベルに達しており高い評価を得た。

(楠)

作者曰く「泥臭く上品とは呼べないかもしれない・・・」が滲み出た作品である。無機質に変わりゆく都市において、魅力的で力強い生命力が宿る「ナニワ文化」を脈々と受繋ぐ記憶装置としての建築である。

総合力として「創造力／アイデア」「構成力／ロジック」「表現力／グラフィック」による完成度の高い作品が入選候補に名乗り出るが、異論なく高いレベルとの評価を得た。加えて私自身が特に注目した点は、建築・空間の魅力とリアリティである。線型による造形や積層された不整形な吹抜空間は、都市スケールと呼応したダイナミックな構成であり、かつ様々な活動が覗える空間として魅力的である。建築を統合するプログラム（ミュージアム）としてもう一工夫欲しいところではあったが、「日常と人」「街と駅」など、学生生活の集大成として敢えて身近なことに着目しカタチへの変換を試みた意欲は好感が持てる。

最後に、黒褐色のグラフィック・手書き表現は作品の物語性と前述の「泥臭さ」と相俟って印象的であったが、触れると色移りする印刷やパネルノリのべたつきは、狙いであったのだろうか。なかなかの完成度である。

（伊藤）

ろう

相見 良樹君（大阪工業大学）

霞がかかった琵琶湖に漂う「ろう」。繊細な表現と美しい色づかひの表紙が審査員全員を魅了した。構造体が浮かび上がり、一見 廃墟に見える詩的なドローイング。次に何が来るのか審査員の期待を高める巧みなものであった。

滋賀県の琵琶湖を中心とした南北の人口や生活の差異化を問題として捉え、「ろう」を利用した「セカンドライフの場」を提案すると共に、湖上交通の再生と地域の活性化を狙う。

「ろう」とは 湖上のセカンドハウスとレクリエーション施設の複合施設。それぞれのユニットが停泊場ごとに、時には季節ごとに組み合わせを変え、利用者を楽しませる。湖上のセカンドハウスは 1週間をかけてのんびりと琵琶湖での航行と停泊を繰り返す。セカンドハウス利用者は、「ろう」施設内や、停泊先で旅の生活を楽しむ。地域住民は、「ろう」という施設の利用を楽しんだり、「ろう」自体が創り出す水辺の景色の変化や利用者との交流を楽しむ。

湖上を移動可能な施設「ろう」が 湖上・湖岸で織りなす活動とシーンを、繊細で落ち着いた色調のドローイングと 空間の特徴を理解しやすいパースで、明解に説明しており、素晴らしい。

コンセプト、プレゼンテーション技術、空間構成、作品の展開において 他の応募作品とは一線を画す秀逸な作品であった。

（大澤）